

Title	チャールズ・ナイトと『ペニーマガジン』：十九世紀前半英国の出版文化
Sub Title	Charles Knight and the Penny Magazine : a study of print culture in early Nineteenth Century Britain
Author	伊東, 剛史(Ito, Takashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2005
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.74, No.1/2 (2005. 9) ,p.131- 159
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20050900-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

チャールズ・ナイトと『ペニーマガジン』

——十九世紀前半英国の出版文化——

伊 東 剛 史

はじめに

私が少年の頃は今はごくありふれている、若者に知識を与えるのに役立つ安い雑誌などなかった。そうした民衆教育の本があれば私の読書に役立つたかもしれないが、手の届くところにはなかったのだ。⁽¹⁾

反穀物法同盟のスポークスマンとして知られるアレクサンダー・サマヴィル（一八一——一八八五年）は、自伝の中で一八二〇年代をこのように振り返っている。彼がこの自伝を著した一八四八年までの約三十年の間に、出版物の増加と読者層の拡大によって出版文化の状況は急激に変化した。⁽²⁾ その変化のきっかけになったのが、有用知識普及協会 Society for the Diffusion of Useful

Knowledge（以下、SDUK）から刊行された『ペニーマガジン』The Penny Magazine である。

SDUKは一八二六年、安価な出版物の普及による労働者教育の推進を目的に設立された。組織は中央委員会と各都市に設けられた地方支部からなっていた。理事長はホイッグ党の政治家ヘンリー・ブルームが務め、理事にはオルソープ卿、ラッセル卿、M・D・ヒルなどのホイッグ党議員や聖職者、医者、弁護士、学識経験者が名を連ねた。⁽³⁾ SDUKは多大な債務により実質的解散に追い込まれた一八四八年までに、「有用知識ライブラリー」、「面白知識ライブラリー」など合計一〇〇点以上の書籍と、『ペニーマガジン』、『ペニー百科事典』などの雑誌、そして地図と暦を刊行した。⁽⁴⁾ 『ペニーマガジン』はその中で最も成功した刊行物だった。

『ペニーマガジン』はウィンザー出身の出版者、チャールズ・ナイトを編集者として一八三三年三月に刊行され、二十万部という前例のない発行部数を記録し、その読者は百万人にのぼると推定された。発売は毎週土曜日、紙面はほぼA4サイズで、一号あたり八ページだった。内容は、ナイトの言葉を借りれば、「自然誌の驚くべき事柄、彫刻や絵画における偉大な芸術作品の解説、歴史に興味を抱かせるような遺跡の描写、旅行記、世界のあり方に消えることのない足跡を残した人々の伝記、言葉や数の基本法則、統計学や経済学の成果」である。⁽⁵⁾

『ペニーマガジン』が成功した理由は豊富な記事の内容だけでなく、挿絵の品質とその使い方にもあった。それまで出版市場に出回っていたチャップブックやブロードサイドよりもはるかに優れた木版画が、『ペニーマガジン』には数多く掲載されたのである。しかし、似たような雑誌が次々と出版市場に現われてくると、『ペニーマガジン』の発行部数は次第に減少し、一八四五年には四万部程度まで落ち込んだ。そのため、SDUKは『ペニーマガジン』の出版続行を諦め、チャールズ・ナイトは『ペニーマガジン』を『ナイトのペニーマガジン』として存続させようとした。しかし、その試みは成

功せず、『ナイトのペニーマガジン』は半年後、廃刊になった。本稿はこの『ペニーマガジン』という雑誌の歴史的意義を、当時の社会的・文化的状況に即して再評価しようという試みである。

これまで、イギリス社会史におけるSDUKや『ペニーマガジン』の歴史的意義をめぐる議論では、ミドルクラス対労働者階級という枠組みが設定され、ミドルクラスのモラル・ヘゲモニーの手段としてのSDUKの役割に焦点が当てられてきた。つまり、言論の自由を求める労働者階級のラディカル・プレスを排除するために、そして労働者階級にミドルクラスの価値観を植え付け、政治的、社会的安定を回復するために、SDUKは『ペニーマガジン』などの安価な出版物を刊行したと説明されてきたのである。したがって、きわめて政治的な意図をもって刊行された『ペニーマガジン』の役割は否定的に論じられてきた。労働者の読者は『ペニーマガジン』を読むよりも、もっと楽しい余暇の過ごし方があったし、自己改良に励む少数の労働者にとっても、SDUKの提供する知識は彼らの需要に見合うものではなかったと議論されてきた。⁽⁶⁾ミドルクラスのモラル・ヘゲモニーに対抗しうる自律的な活字文化が労働者階級の間には存在し

たことを示す重要な証拠として、SDUKと『ペニーマガジン』の「失敗」が論じられてきたのである。

しかし、書誌学や雑誌研究の分野におけるスコット・ベネット、パトリシア・アンダーソンの研究によって、こうした枠組みでは説明することのできない、『ペニーマガジン』の興味深い特徴が明らかにされてきた。⁽⁷⁾ 本稿は、これらの研究成果を踏まえたくえで、次の三つの視点から『ペニーマガジン』を分析する。⁽⁸⁾

最初に、チャールズ・ナイトのエディタースhipに注目する。ここで強調したいのは、編集者は全く自由に記事の内容を決められたわけではない、ということである。編集者は、印刷技術や誌面構成など様々な条件のもとで、ひとつひとつ記事をつくっていくのである。ここでは、そうした様々な力学が作用する場を編集の場と呼ぶことにする。そして、そこにどのような言説が現われてくるのかを分析し、従来の研究では見過ごされてきた『ペニーマガジン』の特徴を明らかにする。

次に、『ペニーマガジン』の置かれた出版活動の場の構造を分析する。具体的には、主に書籍市場において『ペニーマガジン』がどのような位置を占めようとしたのか、そして他の出版物の位置とどのような関係にあっ

たのかを明らかにする。未曾有の発行数を記録した『ペニーマガジン』に対しては、他の様々な新聞や雑誌から批判が浴びせられた。こうした『ペニーマガジン』を取り巻く書籍市場の見取り図を描くことで、『ペニーマガジン』が決してミドルクラス対労働者階級という枠組みからだけでは捉えきれない、複雑な特徴をもっていたことを明らかにする。

最後に、『ペニーマガジン』が実際にどのように読まれていたのかを、あるひとりの労働者の視点から考察する。その読書体験が、この労働者の自伝にどのように記述されたのかを分析する。

一 「ホガースとその作品」

『ペニーマガジン』には毎週土曜日発売の週刊号の他に、毎月最終土曜日に出される増刊号があった。八ページの紙面にできるだけ多様で豊富な記事を載せようとする週刊号に対して、増刊号は基本的に一つのテーマしか扱わなかった。⁽⁹⁾ この週刊号と増刊号のどちらかに、一八三四年三月から翌年五月にかけて、一八世紀の画家・銅版画家ウィリアム・ホガースを紹介する「ホガースとその作品」が掲載された。

複製画は木版画家ジョン・ジャクソンによって彫られた。彼は木版画の質を飛躍的に進歩させたトマス・ビュイックのもとで学び、その技術を初めて安価な印刷物に用いた。挿絵入り雑誌を速く、しかも大量に印刷するには、銅版画ではなく活字と組むことのできる木版画が適していたのである。銅版画の細密な線や陰影が、木版画でもそれなりに再現できるようになり、機械印刷による複製であつても元の作品と同様に、そこに描かれているものの性質を示すことができる⁽¹⁰⁾と主張された。

おそらくホガースの作品は、挿絵と活字を組み合わせた『ペニーマガジン』の編集方法にとって最適の素材だったと言える。『ペニーマガジン』が引用したチャールズ・ラムの言葉にもあるように、彼の版画には「暗示的な様々な意味をもった言葉」「傍点は原文斜体、以下同様」が溢れている」と考えられた。そして、他の絵画が「見る」ものであるのに対し、ホガースの版画は「読む」ものであると捉えられた⁽¹¹⁾。したがって、版画のもつ意味を言葉にし読者に伝えるという編集作業は、作品と解説とを同じ紙面の中で連携させることで、効率よく行うことができたはずである。

『ペニーマガジン』を分析したアンダーソンが指摘す

るように⁽¹²⁾、全十六回の連載のうち『勤勉と怠惰』(第二、三回)には、美術作品によって読者の労働意欲を向上させ、生活態度を改善させようという『ペニーマガジン』のコンセプトが端的に表れている。『勤勉と怠惰』は同じ親方のもとで徒弟として働く二人の織工の対照的な人生行路を描いた十二枚組の版画である。賭事に溺れた怠惰なトムは最終的に殺人容疑で逮捕され、タイバーンの公開処刑場へと運ばれる。一方、勤勉なフランシスはロンドン市長になり盛大なファイナレを飾る⁽¹³⁾。

チャールズ・ナイトが『勤勉と怠惰』を『ペニーマガジン』に載せたのは、賭事や飲酒が悪習であると読者に認識させ、勤勉と節約がいかに大事かを説くためだとアンダーソンは論じている。たしかに、このナイトの意図は作品解説だけでなくSDUKの設立目的や、ナイト自身の「貧民教育の効果に疑問を抱いたことは一度としてなかった」という述懐からも容易に推測できる⁽¹⁴⁾。しかし、私は次の二つの理由から、ナイトが『勤勉と怠惰』を『ペニーマガジン』に掲載したのは、読者の向上意欲、勤勉性、経済性を促進させるためであると断定的に捉えるのには反対である。

第一に、ホガース自身の意図に注意しなければならな

いからである。ホガースはもともと『勤勉と怠惰』を若い徒弟への教訓として制作した。彼が残したメモには、『勤勉と怠惰』は「それぞれの版面は誤解を生む個所がないように彫られて」いて、「十二枚の版面は若い人々に有益となるよう計算され、図像だけでなく言葉によっても伝えるべきことは全て⁽¹⁵⁾に描写されている」という作品の制作意図が記されている。実際に、ホガースが『勤勉と怠惰』の購入者として考えたのは、徒弟自身やその雇用者である親方であり、彼らでも手の届くように値段を設定しようとした。そのため事前の宣伝をしたり、予約購入者を募ったりはせず、一枚一シリング、十二枚で十二シリングとして売り出した。この価格でも徒弟の収入では届かないが、親方が贈物として与えるなどしてクリスマスには非常に良く売れたとホガースは述べている。

第二に、このホガース自身の意図に留意したうえで、ナイトがどのように『勤勉と怠惰』の解説を編集したのかという、『ペニーマガジン』のオリジナリティを明らかにしなければならぬからである。「ホガースとその作品」シリーズ全体の四分の一にあたる紙面が割かれた『勤勉と怠惰』には、作品の時代背景の説明や、批評家

によるホガース論など、さまざまな文章が織りまぜられていた。したがって、「ホガースとその作品」を分析するときには、それを編集したチャールズ・ナイトの意図を分析しなければならぬ。ここで重要なのは、制作者や編集者の意図と、他の要因がどのように雑誌編集の過程に作用し、ひとつの記事をつくりあげているかを明らかにすることである。

最初に、ナイトがホガースの意図に沿いながら、どのように挿絵と解説を組み合わせ、道徳的な意味を引き出したのかを分析したい。『勤勉と怠惰』の一枚目『仕事場の徒弟たち』には、次のような解説文が載せられた。

道徳を説く画家「ホガース」が最初に見せるのは同じ職場にいる二人の織工である。ひとりには素直で慎ましく、知的な表情をしているのにすぐ気づく。もうひとりの知性のない卑しい顔立ちからはその人物の粗野な気質がうかがえる。織機の上の陶器瓶と横にあるパイプからは、彼が眠いのは疲れているからではなく、怠けているからだということがわかる。彼は杼で遊ぶうるさい猫にも、彼を懲らしめるためにステッキを胸元に上げて怒った歩みで中に入って

くる親方にも気づかない。⁽¹⁶⁾

この解説は最初に読者の視線を勤勉な徒弟へ向けさせようとする。そして、視線はもう一人の怠惰な徒弟へと向かわされ、瓶、猫、パイプ、親方といった周囲の状況へと視野が広げられる。また、この解説は、絵の見方の模範例を示している。知性のない卑しい顔立ちから、陶器瓶やパイプから、そばで遊ぶ猫や彼に怒っている親方から、その他にも周囲の装飾——たとえば織機のもとに置かれた対照的な本の状態——から徒弟の怠惰を読みとるように指示する。解説文はそれぞれ対象から何を讀みとるのかを示し、そこに対照的な二つの性質——勤勉と怠惰——を発見するように仕向けている。

この説明の仕方は、確かに作品の画面構成にすでに仕組まれていた。ホガースはつねに勤勉な徒弟を画面の右側に、怠惰な徒弟を左側に配置し、その見方にパターンができるように計算していた。⁽¹⁷⁾『ペニーマガジン』の解説はそれを言葉に移しかえたものと言える。対になる版画では、解説は必ず右側に立つ徒弟から始められた。

こうして制作者の道徳的な意図に忠実に従い、読み取るべき意味を言語化し、視覚との相互効果を生み出す一

方で、ナイトは作品に新しい意味を持たせようとした。それは作品中の怠惰な徒弟を下層社会の悪習の権化であると捉え、作品中の出来事がまさに自分の身に降りかかってくるというリアリティを読者に感じさせることだった。彼は「ホガースの怠惰な徒弟は下層社会の悪習の性質を明らかにしている」と説明し、作品の世界がホガースの自ら観察した現実と変わらないことを強調するのである。⁽¹⁸⁾

しかし、ホガースはこの一連の作品について、「物語全体を一つの小咄にして、飲み屋、「晩餐会での」骨しやぶりの競演会、ロンドン市長就任式の様子をそのひとこまとして描く」ことも考えた。ここでは、彼自身は作品の現実性と虚構性とを区別していない。むしろ両者の曖昧さを曖昧なものとしておくことで、道徳的教訓だけでなく嘲笑や憐愍も交えた作品の重層的な読みを許す、演劇的なリアリティを生み出していた。⁽¹⁹⁾たとえば作品のモチーフは一七世紀初頭の芝居『イーストワード・ホーム』であり、また『勤勉と怠惰』そのものが喜劇役者ジエイムズ・ラヴによって再び芝居に仕立て上げられた。⁽²⁰⁾つまり『勤勉と怠惰』の読み方は、実社会や舞台芸術との相互互換的な関係によって作品に重層的に織り込まれ

ていたのである。

この『勤勉と怠惰』という作品の演劇的な性格が、『ペニーマガジン』では消えてしまった。ナイトは『勤勉と怠惰』の虚構性を切り捨て、その内容をすべて「現実」へと不可逆的に結びつけようとしたのである。たとえば、勤勉な徒弟が敬虔な信者として描かれた教会のシーンでは、勤勉な徒弟の隣で眠っている男性や、扇子を広げる女性、席に着かず背を向けて聖書を読み耽る太った老婆が、見る者の笑いを誘う——あるいは嫌悪感を抱かせる——舞台装置としてではなく、「人生の偶然の真実」として、「『道徳的美徳を説くという』効果を損ねるところか、むしろその手助けになっている」と解説された。⁽²¹⁾虚構的、笑劇的な挿話として描かれたひとこまが、現実の一部として意味付けられるのである。

このようにナイトは若い徒弟への教訓であった『勤勉と怠惰』を、ひとつの物語ではなく、下層社会の悪習の標本として編集しようとした。そして、作品に描かれた物語が、実は読者の身の回りの出来事であることを示そうとした。ナイトは作品解説の途中で、ある一通の手紙を読者に紹介した。それは「非常にみすばらしいところから」身を立てた「知性ある若い男性」の手紙である。

チャールズ・ナイトと『ペニーマガジン』

その手紙を送ったジョンは靴職人の徒弟修業中に、長く辛い労働から早く開放されて思う存分楽しみたいと願っていた。しかし、年長者のブラウンから耐えることを諭され感銘を受けた。それでブラウンの見識が他の読者にも役に立つようと、会話の内容を『ペニーマガジン』に送ったのである。ジョンが感動したブラウンの言葉は次のようなものだった。

なあ、ジョン。このことについては君よりも私の方が幅広い視野をもっているようだな。私は自分が文明社会の一員であると感じている。だから、そうではなくては手に入らないような権利や楽しみや恩恵をたくさん享受している。私にも欲しいものはたくさんある。私は自分が育てない小麦からパンを手に入れたにちがいない。自分の殺していない動物の肉を食べ、自分では作れない服を着ている。お茶は中国から、砂糖は西インドから手に入れる。こうした恩恵、つまりは利益を交換するときに、怠惰になったり楽しい場所を遊び回る野蛮な権利を放棄することが必要だと私は理解している。社会が私と交す契約はごく理にかなった公平なもので、私は自分が不平

一三七 (一三七)

を言う権利なんてまったくなくないと思つてゐるんだ。⁽²²⁾

『ペニーマガジン』には、作中の勤勉なフランシスにかわつて実在する（とナイトが主張する）ブラウンが登場し、勤勉な職人の先達として、怠惰を放棄するのは文明社会では当然のことだと説く。その日常生活に密着した道徳論には、政治経済学のレトリックが用いられている。それは、社会は狩猟採集を生活の糧とする野蛮な生活様式から、農業と商業が発達した商品交換による生活様式へと発展したのだから、その社会の一員たる労働者も道徳的に発展しなければならぬという命題である。⁽²³⁾ こうして『ペニーマガジン』は、勤勉な徒弟のように勤勉であることが名誉と尊厳をもたらした実例としてロンドン市参事会員の略歴を並べ、「諸国民の繁栄とそれゆえの力強さ、幸福は、ひとりひとりが勤勉であるかどうかにかかつてゐる」と論じている。そして、『勤勉と怠惰』という作品から、「個々の勤勉を結集することが社会に繁栄をもたらす」という結論を導くのである。⁽²⁴⁾

しかし、『勤勉と怠惰』の読みを「現実」へと不可逆的に結びつけ、読者の経済的実践を引き出そうとする編集方法は、重層的に読むことのできる作品を一面的に解

釈する危険をとまなつていた。演劇的なりアリティを作品に認めなければ、ホガースを芸術家として認めるのが難しくなるからである。

『ペニーマガジン』刊行当時、批評家によるホガースの評価は一様ではなく、作品ごとの評価も異なつていた。商品としては同時代から人気があつたものの、粗野で不道徳な下層社会を描いた作品は、その素材同様に低俗であるとする見方もあつた。したがつて、ホガースを芸術家として読者に認知させ、その作品を安く大量に普及させることが読者の美的センスの向上につながり、なおかつ道徳的な効果もあることを示すことが、編集上求められた。

一八三三年、つまり「ホガースとその作品」の連載が始まる一年前、ロンドンで『ホガースの覚書』が刊行された。そこにはホガースの遺稿だけでなく、著名な批評家たちのホガース論が含まれてゐた。目次には、ホレス・ウォルポール、ギルピン、アイルランド、クリステイ、フィリップス、リチャード・ペイン・ナイト、ブリトン、アラン・カニングム、ハズリットそしてチャールズ・ラムの名が並べられている。彼らのホガース論は幅広い影響力をもつてゐた。

こうした批評家たちにとって作品に込められた道徳性、喜劇、笑劇、風刺、ユーモアが傑出したものであるのは、まず疑いなかった。彼らの意見が別れたのはむしろ画面構成、明暗法、表現力、デッサン力など技術面の評価と、美術史における位置づけの問題だった。とくに問題になったのは、ロイヤル・アカデミーの歴史画派に対する位置づけだった。たとえば、アカデミー会員のフィリップスは、ホガスが絵画と版画の「道徳的な効用」を明らかにした才能を認める一方で、プッサン、コレツジョなどの「大家」による歴史画にも、ヴァンダイクの肖像画にもとうてい及ばないと述べている。フィリップスは結局「誰とも違う彼独自の方法により、そしてその方法においてのみ、彼は傑出しているのである」とホガスを位置づけた。⁽²⁵⁾

ナイトはこのようなホガス批判を知っていたに違いない。「ホガスとその作品」シリーズの第一回では、連載予定二十四作品のリストを示し、「どんなに手厳しい芸術的嗜好の持ち主でも、ここに挙げられた作品によって気分を害されることはない。ホガスの作品をよく御存知の方ならそれに気づかれるだろう」と述べている。ホガスは巧みな技によって描かれている対象への嫌悪

チャールズ・ナイトと『ペニーマガジン』

感を遠ざけ、怠惰や悪習といった題材を道徳的な芸術に昇華させたとナイトは主張した。⁽²⁶⁾

さらにナイトは歴史画派の批判に対して、当時の批評家たちのなかで最もホガスを評価していたチャールズ・ラムの言葉を引用した。

ジョシユア・レノルズを仰ぎ、この国の偉大なる歴史画派を褒め称える者のあいだでは、ホガスを下等で低俗な芸術家の類として、その歴史画派から除外することが流行している。私には、こうした人たちが庶民生活や低俗な生活の中にある主題を描くことと、低俗な画家であることを混同しているように見える。⁽²⁷⁾

ホガスを肯定的に評価する文章を引用したのは、この連載第一回だけではない。ホガスの絵には墮落や愚行の描写の中にも、見る者に人間性や同情心を思い起こさせる「何か」があるというラムの評価や、喜劇画家として考えるとしても、ただ笑いの渦をもたらす画家としてではなく、穏やかで幅広い見方のできる画家として理解すべきというウォルポールの評価などが、作品解説の

一三九 (一三九)

間にちりばめられた。⁽²⁸⁾

編集者に課せられたのは、ホガースの作品の芸術的価値を、初めてホガースに接する読者から批評家・知識人まで、広範にわたる読者に認知させることだけではない。シリーズ最終回では、それを誰にでも買えるように大量再生産することの意味が説かれている。

最終的に「ホガースとその作品」には当初予定されていたより、四点多く作品が掲載された。ナイトはその理由を、「総合誌として発行部数も多い『ペニーマガジン』に載せることが許容される限り、読者にできるだけ多くのホガースの作品と接してもらおうと願ったから」であると説明している。また、掲載予定の作品リストを準備したあとで、必ずしも基準から外れない作品がある⁽²⁹⁾と考えるようになったとも書いている。彼はその基準を次のように記している。

両親が躊躇せず子供にホガースを学ばせるには注意深い作品の選択が必要であり、彼の主要な作品を一部除かなければならない。多少なりとも彼の作品を知った者にとって、それは明白である。私たちの目的はただ家庭版ホガースを提供することだった。彼

の一般的な作品には子供の眼に不適切なものが含まれている。しかし、偉大なる芸術家の作品とそれが伝える道德の教えが、まったく子供に知られないままになつてはいけ⁽³⁰⁾ない。私たちの目的はそこにあつた。

そして現在はホガースの時代より、道德や芸術的嗜好、洗練の度合いからいっても進んでいるという前提に立ち、「今、このとき、女性にとつて不快でも子供にとつて有害でもないと考えられるものだけを、彼の大量の作品の中から選び出さなくてはならない」とナイトは述べた。こうした理由から、『娼婦一代記』の全作品や、あまりにも残酷で、カニンガムが「描かれなければよかった」と嘆いた『残酷の諸階梯』が除外された⁽³¹⁾。その他にも、紙面の都合から、『放蕩者一代記』と『当世風結婚』の一部の作品が、その教育的な内容にかかわらず削除された。ここまで見てきたように、一年余りにわたって掲載された連載記事「ホガースとその作品」の編集過程には様々な要因が絡んでいた。まず木版画による絵画作品の模写が安く、しかも大量に生産することができるようになったのは、木版画の製作技術の改良と、それを機械印

刷に活かすための鉛版の使用があったからである。こうしてナイトがホガースを選び、誌面構成等の物理的な条件のもとで『勤勉と怠惰』を大きく取り上げたのは、出版物の普及を通じた労働者教育というSDUKの目的に沿うものだった。しかし、ナイトはまったく自由に作品の意味を読み込めたわけではない。ホガースの作品の芸術的側面である演劇的なリアリティ、つまり重層的な読みを、道徳的教訓へと狭めることにはリスクがあった。

ナイトは、実在する人物を紹介して、『勤勉と怠惰』に描かれている二人の身に降りかかった出来事が、実際に読者の身にも起こるという解釈を重ねていった。しかし、それは同時に作品のふくらみを奪い、『ペニーマガジン』におけるホガースの芸術家としての位置づけを危うくしかねないものだった。この一面的な解釈と対置するのが、ホガースを評価する文章の引用や、「家庭版ホガース」という編集方針のアピールだったのである。

編集の場にかかる物理的条件、個人の志向、内在化された作品の意味、芸術批評など、個々の要因の作用の仕方の規定しようとするのは、まさに対象読者像である。これまで『ペニーマガジン』がどのような読者像を想定していたかについては、労働者階級であるとか、あるいは

は曖昧に大衆読者層であるというように、十把一絡げに扱われてきた。しかし、それは時に、労働者本人だけでなく、その妻や子供など、彼らの家庭を射程に入れていたのである。『ペニーマガジン』を買った労働者が自分で読むだけでなく、それを妻や子供に説いて教える姿をナイトは期待したのかもしれない。また、ナイトは、ホガースに否定的な批評家や、芸術の普及という『ペニーマガジン』のコンセプトに批判的な知識人も対象読者として考えていた。この対象読者像の複合性は、出版活動の場や知的生産の場における『ペニーマガジン』の位置関係にも映し出されているのである。

二 出版活動の場・知的生産の場における位置関係

ナポレオン戦争が終結した一八一五年以降、労働者の政治参加を求める『ポリティカル・レジスター』、『リパブリカン』、『ブラック・ドワーフ』は圧倒的な発行部数を記録した⁽³²⁾。これらラディカル・プレスの氾濫に対して政府は、主に新聞印紙税と広告税からなる「知識への課税」を強化した。その結果、合法的に新聞を発行しようとすれば、六、七ペンス以下に値段を設定することは不

可能になった⁽³³⁾。さらにラディカル・プレスに打撃を与えたのは、「ピーターの虐殺」後に制定された「六法」the Six Acts⁽³⁴⁾だった。この条例は「言論弾圧六法」と表現されるように、「ニュース」を含む政府に批判的な新聞の駆逐を目的とした。厳しい取り締まりの中で大半の出版者は、価格を六ペンス以上に設定するか印紙税を収めるしかなく、無印紙新聞の出版活動は一八二〇年代には一時沈静化した。

したがって、一八三〇年以降、無印紙新聞の中心課題はあらゆる知識、とくに政治的な情報を自由に公表する権利を獲得することだった。ウィリアム・カーペンターは政治ニュースを掲載した『ポリティカル・レター』を刊行し、公然と「知識への課税」に挑戦し、その姿勢はヘンリー・ヘザリントンの『プアマンズ・ガーディアン』へと受け継がれた⁽³⁵⁾。一八三二年七月創刊の同誌は「知は力なり」“Knowledge is Power”を表紙に掲げ、この時期に刊行された約五五〇点の無印紙刊行物を代表する新聞となった⁽³⁶⁾。このような状況を小説家でもあった庶民院議員エドワード・ブルワーリットン⁽³⁷⁾は、「上流・中流階層の教育を受けた人々からなる公衆」と「困窮している無知な、簡単に影響されてしまう人々からなる公

衆」との「二種類の公衆」“two publics”が存在すると表現している。『ペニーマガジン』が刊行されたのは、まさしく印刷物の氾濫と読者層の急激な拡大に政府が対応を迫られたときだったのである⁽³⁷⁾。

ナイトの自伝によれば『ペニーマガジン』のアイデアが浮かんだのは、「無印紙週刊誌」が選挙法改正後の政治的熱狂とともに町に溢れている時期に、友人のM・D・ヒルと散歩をしながら「これらの安価で有害な出版物」について話していたときだった。彼らは『ペニーマガジン』の名前が決まると、すぐにその案をブルームのもとに持ち込んだ⁽³⁸⁾。

しかし、無印紙新聞の関係者が相次いで摘発される中で、SDUKの理事会では『ペニーマガジン』が印紙条例に抵触するのではないかという疑念が提示された。また一ペニーの週刊誌はSDUKに相応しい刊行物ではないという慎重論もあった。最終的に判断を下したのはブルームだったようだが、ナイトは理事会に対し積極的にゴーサインを促した⁽³⁹⁾。

彼は第一号の見本刷りが出来上がると、それを協会幹事のトマス・コートツに送り理事会の決定を催促した。彼はその手紙の中で、「自分にとって一層重要になる仕事

を新たな税が脅かすのではないかという不安を感じることもなく、これまで以上に編集者としての任務を安全に遂行することができず」と訴えている。また自ら説得に赴くためか、理事会を開くように頼み、その時にはすでに印刷所にある第二号を持参すると書いている。つまり、ナイトにとって当面の課題は印紙税が適用されないように『ペニーマガジン』を編集することと、それを理事会に信用してもらうことだったのである。⁽⁴⁰⁾ 実際、『ペニーマガジン』創刊後には再びコーツに手紙を出し、今度は見本刷りを当局に送り、同誌が印紙条例に抵触しないことを確認するよう求めた。

雑誌の見本二号分を印紙税当局に送り、理事会で呈された疑問を書き添え回答を求めた方がよいでしょう。当局は会議にかけ公式に回答するでしょう。私自身に関して言えば非常に安心していきます。もしそうでなかったら、彼らはカーペンターのポリテイカル・レターを攻撃したように理事会を攻撃したことでしょう。カーライルの刊行物は印紙法に抵触していません。ニュースを伝え新聞で報じられる出来事にコメントしたからです。リテラリー・ガゼットや

チャールズ・ナイトと『ペニーマガジン』

アシニアムは演劇や有閑マダムニュース「原文下線」を含んでいるのに印紙税を払っていませんが、ペニーマガジンはそれよりもさらに新聞とかけ離れています。すでに数年存続しているミラーと同じようにペニーマガジンは新聞ではありません。⁽⁴¹⁾

『ペニーマガジン』を合法的かつ無印紙で刊行したとき彼が念頭に置いたのは、この手紙に示されている二種類の印刷物だった。一つは『ポリテイカル・レター』や『リパブリカン』などの労働者階級の無印紙新聞、もう一つは『リテラリー・ガゼット』、『アシニアム』、『ミラー』などの比較的安価な週刊文芸誌だった。したがって、『ペニーマガジン』は、系譜の上では低価格化の進む文芸誌の流れに与しつつ、価格の上では非合法紙と同じであり、それまでの「二種類の公衆」ならぬ「二種類の書籍市場」の枠組みに収まらない位置を占めようとしたのである。それゆえ、両者の立場から『ペニーマガジン』に対する厳しい反応が起こるのも当然のことだった。最初に『プアマンズ・ガーディアン』などラディカル・プレスの反応から見たい。SDUKの質問に対する印紙税当局の回答は、『ペニーマガジン』には印紙税の

課税対象になる部分は全くないというものだった。⁽⁴²⁾ 何を「ニュース」とみなすかについては明確な基準があるわけではなく、判断は法務長官と印紙税当局の自由裁量に委ねられていた。そのため『ペニーマガジン』が課税対象にならなかったのは、大法官のブルームとSDUKの政治的な影響力のためだと労働者階級のジャーナリストは捉えた。当局は批判的な定期刊行物を弾圧しつつ、『ペニーマガジン』を優遇していると彼らは考えたのである。⁽⁴³⁾ 『プアマンズ・ガーディアン』は『ペニーマガジン』に対して真正面から敵対した。自ら「レイバラー」と名乗る寄稿者は、『ペニーマガジン』の創刊号に対して敵意を剥き出し、読者にSDUKの奸計に陥らぬよう注意を呼びかけた。

毎週我々に改心せよと音をたてる、そのペニートランペットを吹き鳴らして楽しめるといふのか。プシユー！ユウヨウ知識。勤勉に働く我々に頼って怠惰に生きてる連中にとっては、それは確かにそうだろう。甘い言葉で我々を丸め込んで、連中の冷酷な支配に気が向かないようにしたり、一日中連中のため

「ガーディアン」の読者よ、有用知識普及協会の下劣な悪巧みには注意せよ。⁽⁴⁴⁾

政治的に対抗する無印紙新聞は、『ペニーマガジン』を雑誌市場から労働者階級の新聞を排除するブルームの目論みであると非難した。⁽⁴⁵⁾ しかし、一方では『ペニーマガジン』によって顕在化した広範な読者層に向けて、雨後の筍のように雑誌が創刊された。その中には『ペニーマガジン』というタイトルを模倣した一ペニーや半ペニーの雑誌が多数あった。⁽⁴⁶⁾ 実際に、『ペニーマガジン』創刊後一年のあいだに、『ヘイペニーマガジン』、『クリスチャン・マガジン』、『女性版ペニーガゼット』、『ロンドン・ペニージャーナル』、『少女少年のペニーマガジン』、『少年少女のペニーマガジン』、『デイブデインのペニーマガジン』、『ペニーコミックマガジン』などが刊行された。さらに『有用知識普及協会による元祖半ペニーマガジン』や『有用知識普及協会刊行ウィークリー・ヴィジター』のように明らかにSDUKの名称を剽窃した雑誌もあつた。⁽⁴⁷⁾ また、「知識に税を課すな」“Tax off Knowledge”を掲げる『週刊タイムズ』に載せられた『ポリテイカル・ペニーマガジン』の広告は、『ペニーマガジン

ン』と比較し同誌ならではの長を強調した。

『ポリティカル・ペニーマガジン』はその名が示す通り主に政治的な問題を扱う。ニュースは掲載しないが、現在に影響をおよぼした歴史的な出来事を中心に扱う。いわば有用知識のようなものである。ブルームは醜悪な有用知識に挿絵を施すのであろうが、我々の有用知識には崇高な目的がある。楽しく読めるだけでなく、興味深く読める雑誌となることをここに保証する。発行は週に一度で月刊版も用意される。毎週土曜日に発売されるので値段は月四ペンスか五ペンス。ブルームは装丁代に一ペニー請求したが、我々はそのようなことはしない。⁽⁴⁸⁾

このように『ポリティカル・ペニーマガジン』は『ペニーマガジン』のタイトル、発売形態、「有用知識」という言葉を模倣しつつ、そこに内容の差異、価格の差異、「有用知識」の意味の差異を施しながら、『ペニーマガジン』に対する「我々の」ペニーマガジンを宣伝しているのである。

『ペニーマガジン』刊行には、政府に批判的な無印紙

チャールズ・ナイトと『ペニーマガジン』

新聞を書籍市場から排除するという明確な政治的意図が込められていた。『プアマンズ・ガーディアン』は、同じようにその政治的意図に反応し、対立姿勢を明確に示した。しかし、より重要なのは、政治的な局面における攻防だけではなく、それが市場における攻防を呼び起こしたということである。『ポリティカル・ペニーマガジン』など他の多くの無印紙刊行物は、『ペニーマガジン』やSDUKへの攻撃的な態度を見せながら、「有用知識」という言葉の商品的な価値を認め、その言葉を用いながら販売戦略を立てていたのである。このように『ペニーマガジン』は政治的な対立関係と、商業的な競合関係とが交差する位置に置かれたが、この位置関係は、別のかたちで既存の文芸誌との関係にも現れてくる。

SDUKが購買層に取り込もうとしたのは労働者階級の消費者だけではなかった。断片的に残された広告費支出の記録と文芸誌の書籍広告欄を調べてみると、SDUKが『ペニーマガジン』、『ペニー百科事典』や「有用知識ライブラリー」などの広告を日刊紙、週刊文芸誌、書籍カタログ誌に掲載していたことが分かる。広告を掲載したのは『タイムズ』、『アシニアム』、『リテラリー・ガゼット』など合計十五紙誌にのぼる。⁽⁴⁹⁾

したがって、二〇万部という発行部数を誇る『ペニーマガジン』の登場を、既存の文芸評論誌は強大なライバルの出現とみなし、批判的なコメントを掲載した。ブルームやSDUKを主要な標的にしたラディカル・プレスとは対照的に、『アシイニウム』は出版者であるナイトを攻撃した。⁽⁵⁰⁾『ペニーマガジン』は「有用知識普及協会」の名のもとに書籍市場を独占し、有害な出版物ではなく、『チェンバース・ジャーナル』、『職工雑誌』、『ミラー』など、すでに読者に厚く信頼されている健全な雑誌を駆逐するとみなされたのである。『アシイニウム』から見れば、SDUKは著名人の名前を使って無知な読者から予約購読料を吸い上げるための看板だった。書籍市場という私的な出版事業の競争の場に、SDUKという看板によって公的な影響力を持ち込んでいることが、何より非難の対象になったのである。

『新・月刊誌』はこの書籍市場のルールからの逸脱を、『ペニーマガジン』誕生秘話を創作するという方法で辛辣に非難した。

ナイトは『チェンバース・エディンバラ・ジャーナル』の計画からペニーマガジンを思いつき、「協会

の名前をくれれば、これは投機になる」とヒルに言った。マシユー・ヒルは「ああ、いいさ」と言いつつ引き受け、雑誌が協会のもとで出版された。……この雑誌は協会の所有物であるかのように発行されているが、実はチャールズ・ナイト出版の所有物である。そのため協会の雑誌と呼ばれるこの週刊誌は、年数千ポンドの利益を彼にもたらしたが、もし本当のこと——書籍販売業者による金儲け以外の何物でもない——が公に知られていたら、今頃は忘却の淵に沈んでいたことだろう。⁽⁵¹⁾

この記事では、SDUKの名前と『ペニーマガジン』を使って金儲けをする出版者としてナイトが描かれている。『チェンバース・ジャーナル』を発行していたウィリアム・チェンバースも後年、『アシイニウム』や『新・月刊誌』と同じような態度をとっている。彼は『ペニーマガジン』の内容は専門的で難解であり、読者の想像力を喚起せず、なにより実際に読んでいたのは手工労働者より余裕のある人々だったと記している。そこには彼ら兄弟がパトロンの援助を受けずに個人的経営を続けてきた誇りが認められる。⁽⁵²⁾

こうした『ペニーマガジン』と書籍市場において競合する文芸評論誌とは距離を置き、一連の動きを俯瞰し、ときに冷笑する保守的な知識人も存在した。トマス・ラヴ・ピーコックの『クロケット城』には、そうした知識人の態度が示されている。作品には、ブルームになぞられた「作家、法律家、政治家の三つの顔をもつ知識人」が、登場人物の一人、フォリオット牧師の話中に登場する。そして、フォリオット牧師は、彼のコック（女性）が、その「知識人」が執筆した「ステイム・インテレクト・ソサエティ」刊行の水力学の小冊子をロウソクの明りで読みながら眠ってしまい、たまたま部屋にやって来た下男が気づかなければ火事になっていた、という話をする。そして、どうしてそこに下男がやって来たのかという質問には、「水力学を勉強するためにやって来たところ、それを実践しなければならぬと気づいたのでしょう」と答える。このフォリオット牧師の態度には「あらゆる知識を全ての者に与えよ」というS D U Kの理念に対して、それを理想主義者の危険な火遊びと見る知識人の反応が示されている。その反応は、ブルームや出版者のナイトを風刺するカリカチュアにも現れている。そこには、労働者に知識を無理やり飲み込ませよう

とするブルームの姿や、読書に熱中するあまり失態を演じる労働者の姿が描かれた⁽⁵³⁾。

こうした立場は、一般的な知識を労働者に与える危険を警鐘しているだけではない。むしろ知識が誰にでも分け隔てなく与えられることの矛盾を笑っているのである。そうした見方からすれば、知識とはそもそも一部の限られたものが生み出し、その間で交換され、享受されるものだった。この立場からの批判は、具体的には、木版画の模写による美術作品の大量機械生産へと向けられた。たとえば『モーニング・クロニクル』は、広範に流通する廉価版の美術作品というのは芸術活動における根本的矛盾である主張した。

ここに断言したい。数学に近道がないのと同じように、芸術に『ペニーマガジン』という道はない。その技術と実践におけるあらゆる要素は、どれも著しく高価なものである。経済学者であれば誰でも知っているように、作品を制作するのに要する膨大な時間、最も高価なものである。用具もまた最も高価な類のものであるし、創作は非常に困難な仕事である。そして最後に、才能と創造力は金銭で買うこと

のできないものである。これらの点は変更することが絶対に不可能な要素だと考えられる。したがって、芸術作品を高尚なものにするのは才能ある限られた者であり、彼らが富裕な有閑層の庇護のもとで行うことである⁽⁵⁴⁾。

この批判は、「知識への課税」をめぐる無印紙新聞からの批判、そして書籍市場のルールからの逸脱を非難する文芸評論誌からの批判よりも、決定的な意味をもっていた。なぜなら、知的生産の場における出版活動そのものの意味を提起するからである。党派対立や宗派対立を招くものを除き、知識を広範に普及させようというSDUKの功利主義的、進歩主義的理念は、印刷・製紙技術の進歩によって実行可能なものになった。しかし、『ペニーマガジン』のように、知識を大量に生産し、際限なく供給することは、知識の自己矛盾ではないかという批判が同時に出てきたのである。それは、まさに『ペニーマガジン』のレーゾンデートルを脅かすものだった。

ナイトは、『ペニーマガジン』に賛同する有識者の意見を引用しながらこうした批判に応える一方で、理想的な読者との関係を演出し『ペニーマガジン』の有用性を

立証しようとした。読者の自伝的手記として紹介された「ある教育を受けた職人の経験」もその一例である。機械労働に従事する寄稿者は、職工学院や独学を通じて得た知識とその効用を並べた⁽⁵⁵⁾。職工学院の読書室を利用して新聞や雑誌を読んだり、週一回のレクチャーに参加したことは、肉体的疲労を癒し心の安らぎをもたらした。ユークリッド幾何学の知識は、少なからず彼の仕事に役立った。そして余暇に読んだ数多くの書物が知的な喜びを与えてくれたと彼は述べる。しかし、その体験は、他の読者の模範として描かれているのではない。むしろ、そこから「多くの民衆に安楽で、尊厳のある、幸福な人生を送らせるためには、彼らの知的な力、道徳的な力は言うにおよばず全人格を啓発するのが最も迅速な手段である」という結論を導き出してくる。つまり、民衆教育の是非をめぐる議論の中に位置づけられているのである。

民衆教育がもたらすであろう効果について多くの議論がなされてきたが、賛同者もいれば反対者もいた。……しかし、個人的な例は労働者階級に対する一般教育の効果を示すものかもしれない。その個人的な例とは私自身の経験であるが、有用性があり関心を

引く経験であると願っている。⁽⁵⁶⁾

このメッセージの受けてとして想定されているのは、寄稿者と同じ職人たちではなく、むしろ『クロチエツト城』のフォリオット牧師のような、民衆教育や知識の普及に懐疑的な知識人層なのである。

三回にわたって掲載されたジョン・キトーの自伝的手記には、このようなナイトの編集意図が如実に現れている。⁽⁵⁷⁾ 最初に、この手記の読者として設定されたのは、「教育の利益をまったく受けていないか、受けたとしても基礎教育以上のものはない人々であり、定まることのない知識の正しい部分をおうにかこうにか集めてきた人々」である。⁽⁵⁸⁾ また、彼の困難や苦境は、一個人の記録としてではなく、「つましい階級」に属する経験であるとされた。『ペニーマガジン』の読者にも当てはまる境遇として語られるのであれば、興味深くまた有用である記録として掲載されたのである。⁽⁵⁹⁾

キトーは子供の頃から自分がどれほど知識を欲していたかを記している。彼は廃屋に残されたピラや書店の窓に貼られた本の表紙や見開きを読んで学んだ。その知識欲は「ある本屋の窓が綺麗になり本や絵が貼り替えられ

チャールズ・ナイトと『ペニーマガジン』

る日を歓喜して迎える」ほどで、ゆとりができたときには「できるだけこざっぱりとした恰好をして、思い切つて育ちの良さを振る舞い古本の露店を見回った」と述べている。⁽⁶⁰⁾

貧乏という困難にいかにか立ち向かったかも描かれている。子供の頃はプリマスの港で商船から投げ捨てられた屑鉄などを拾い集め、一日に数ペンス稼いだ。次に四ペンスで水彩画のセットを買い、絵を描いて一ペニーから一ペニー半で売ることに決めた。胸像、家、花を描き、自宅の窓に貼つたり、露店を出して多少の金銭を得た。また書き方が汚かつたり、綴りが間違っている小店の貼り紙を綺麗に書き直すこともいくらかの稼ぎになった、と彼は記している。⁽⁶¹⁾

このように苦勞して貯めた金は本代に使われた。一八一六年頃は人気小説の抄録版やリプリント版、シェイクスピア風の物語が小冊子になって三ペンスで売られていた。彼は三ペンス貯まるとすぐに本屋に行き、すでに何度も見回つて心に決めていた本をかうのだった。彼はそのときの感情の昂ぶりを、「必要な額に向かつてゆつくりと貯まる蓄えを数えるときの、あの期待感、三ペンスに達して本屋に駆け急いだときの、あの逸る気持ちを描

写するのは難しい」と記している。⁽⁶²⁾

しかし、次第に三ペンス程度の冊子では読書欲が満たされなくなった。そこで思いついたのは、作品を分冊にし定期的に届けに来る行商人からポルトフォリオ版を買うことだった。機会はすぐに訪れた。フェアで水彩画の露店を出したところ、向い側では行商人が『天路歷程』、『ロビンソン・クルーソー』、『アラビアン・ナイト』など数多くのポルトフォリオ版を並べていた。彼は『フランス革命』を隔週ペース、週六ペンス（支払いは二週間一シリング）で購読することにした。しかし、その試みは必要な一シリングを用意できず失敗した。彼はこのエピソードと比較して、今その六ペンスでどれだけ多くの読み物と情報が得られるようになったかを説く。かつては、すかさずかに印刷された八折り版三十二ページか四折り版十六ページ、あるいはフォリオ版八ページしか手に入らなかったが、現在は『ペニー百科事典』二冊と『ペニーマガジン』、そして『チェンバース・ジャーナル』、『サタデイ・マガジン』（一ペニー）を買い、残った半ペニーを一月貯めて、『チェンバースの民衆のための知識』を購入している、と彼は書いている。⁽⁶³⁾

ナイトは『ペニーマガジン』第五巻の終了時において、

この自伝的手記を編集者の視点からまとめている。彼は民衆教育や『ペニーマガジン』の効果を疑う意見に対して、労働者には知識を獲得しようという意欲があると反駁する。「『ペニーマガジン』が創刊されるまで、この国の大半の労働者にとって唯一可能な読み物は新聞だった。彼らの手の届く書物はほとんどなく種類も限られていた」と主張する。そしてキトーの自伝的手記はこの事実を示す「非常に興味深い例」とし要約される。つまり「彼らの手の届くところ」に書物を普及させたこと、そして知識を欲する「彼ら」に「自己啓発」を促したことに『ペニーマガジン』の社会的有用性があるという証拠にキトーの手記が用いられたのである。⁽⁶⁴⁾

三 階級という読者

最後に、あるひとりの労働者の自伝をもとに『ペニーマガジン』が実際にどのようなように読まれていたのかを考えてみたい。

労働者の自伝をただテキストとして読んだ場合、それは過去についての事実をそれぞれの人間が思い思いの方法で表象する行為（記憶違い・嘘・沈黙も含める）として解釈され、作者の自己認識を探るための資料となる。⁽⁶⁵⁾

しかし、書物としての自伝は思い描かれた事実の累積物ではない。苦勞して身に付けた読み書き能力を發揮して自伝を書き、さらに出版し、世間に公表することは、過去の体験を再構成するだけではなく、その行為に現実的な意味付けを行うという実践行為だった。

自伝をめぐる「約束ごと」のうちに、労働者たちの社会経験と、それを描写し、後世に残ることがいかに社会的意味を獲得したかを見ることが出来る。自伝というジャンルが一般的に定着したのは一九世紀のことである。一八三〇年代頃までに定式化されたその「約束ごと」は、一つはその語源 self (auto) - biography に現れているように「当人執筆」であることと、もう一つは読者にとって有用であることだった。ヴィクトリア朝の典型的な自伝とみなされているジョン・スチュアート・ミルの『自伝』(一八七三年)はまさにその見本である。

労働者の自伝作者はメソディズムや口頭伝承(オーラル・ヒストリー)の伝統を受け継ぎながらも、これらの定式化された「約束ごと」を受容し、その定型文句を彼らなりの言葉へと変容させた。たとえば、ベスト・セラ―となった『ある乞食少年の自伝』は、著者が自伝を出版する大きな理由として、「ある人間が人知れぬ卑しい

生活から、たとえば若い画家や詩人がもつ才能のような力によって努力し、少しずつ歩んできたのであれば、そのような人間の一生は共有の財産となる。私たちは困難を克服しようとするときに、その立派な実例から忍耐する術を学ぶのである」と述べている。⁽⁶⁶⁾ こうして作者は自己の経験を労働者の共有財産として意味付けようとしている。もちろん、すべての自伝作者が自己の記録の有用性に自信を持っていたわけではない。アレクサンダー・サマヴィルは「一般の読者にとって有益な考えを練る資格が自分にあるのか疑わしい」と不安を表明しながらも、自分の人生の記録に読者と共有しうる社会的な価値を与えようとした。⁽⁶⁷⁾

チャーティストのひとりトマス・クーパーもサマヴィルと同じように、「多くの人にとって私の記録が役に立たないのは疑いないが、……しかし、それでも私は、それ以外の人が多少なりとも価値あるものを見つけてくれると願っている」と述べた。そして、自伝が真実の記録であることを表明した。

記録する価値のある人間の一生とは書き上げるに足る人生のことだ。だから私の人生のあらましには、

賢明であると判断する限り、できるだけ沢山のものを盛り込むことにする。私に喜ばしいものであれば、もつともつと書き綴る。私の本を読むことで喜びが得られるなら、それを共有したいのだ。これだけははっきりと言える。喜びを共有することなど無理だと考えていたら、私はこの本を書かなかつた。それゆえ私が真実をあらわにしたことを読者はすぐに理解するだろう。この本を書いたのはまず自分自身にとって喜ばしいことだったからだ。この喜びこそ誰もが自伝を書く理由ではないだろうか。⁽⁶⁸⁾

このように実例としての価値は、その自伝が嘘偽りのない真実の記録であることにかかっていると考えられた。サミュエル・バンフォードも「この『若かりし日々』という自伝は読者を前にして、飾ることなくありのままに語るであろう」と読者に約束した。⁽⁶⁹⁾しかし、自伝を公表することは、その記録を「エリート文化」による読解にさらすことも意味していた。たとえば、『ある乞食少年の自伝』はタイトルに自伝と記されているにもかかわらず、初版では著者名が伏せられていた。そのため『タイムズ』から本当に「当人執筆」の事実の記録であるか疑

念を抱かれ、追跡調査ののちに自伝と認められた。⁽⁷⁰⁾

このように労働者の自伝の読まれ方、受け取られ方を考慮すれば、それが分節化された過去の事実の集積であったり、あるいは書くという言語行為のうちに自我を維持しようという静態的・内面的な試みを表わしているだけではないことが分かる。それは、自己の経験に読者と共有しようの意味を施すことを目的とした、言説（テキスト）と実践（出版・公表）の構成物だった。彼らは人生の記録を労働者階級の模範であり、労働者階級の進歩の見本となる有用な書物として意味付けようと試みたのである。したがって自伝に記されている読書経験は、たんなる彼らの読書ノートではなく、彼らが何を読み、どんな影響を受けたかを自ら再構成したテキストである。同時にそれは、不特定多数の読者に公表することで、自分の読書経験と知的発展とを意味付ける試みでもある。この社会的実践としての『ある職人の自伝』を分析したい。

『ある職人の自伝』の著者であるクリストファー・トムソンは、船大工の家庭に生まれ、その徒弟になったものの関心は読書、絵を描くこと、政治、花、芝居に向けられていた。⁽⁷¹⁾政治に関心を持ったとき彼が最初に手にしたのは、ラディカル・プレスの『ポリティカル・レジス

ター』と『ブラック・ドワーフ』だった。毎週土曜日の夕方、仕事の後にこうした雑誌を買って政治経済学について勉強するのが彼の習慣だった。⁽⁷²⁾

トムソンは船大工にはならず、役者として旅の一座に加わって地方を巡業したあと、ノッティンガム付近の小村に住み着いた。そこで彼は自分と同じように向上意欲をもつ友人を見つけたが、貧乏なため本を買えなかった。この「ただただ本が欲しかった」ときに、彼は『ペニーマガジン』に出会った。友人から第一巻を借りて読んだトムソンは、第二巻から予約購読者になり最終巻まで購読し続けた。彼は家族を犠牲にしないように、自分の紅茶に砂糖を入れるの止め購読費を貯めた。

私は最終号が出版されるまで予約購読者だった。私はこの印刷物から恩恵を受けた何万人ものうちのひとりにすぎないが、この進取の気象に富む出版者に感謝の念を表わしたい。『ペニーマガジン』は知の路程に立てられた最初の里程標だった。来たるべき時代は、この里程標に依って活字社会への進歩を評価することになるだろう。⁽⁷³⁾

一八三六年、トムソンは友人とともに図書館と相互改良協会を設立した。一八三八年には図書館を建て、九年間のうちに五〇〇冊もの本を集めた。彼は「その飾り気のない本棚には本当に価値のある書物が並んでいた」と述べ、スコットやバイロンなど著名な作家の他に、『絵入りシェイクスピア』、『絵入りイングラント史』、『ペニー百科事典』などナイトの出版物をあげた。また「図書館の核になると考えられていた」雑誌として、『アシニアム』や『チェンバーズ・ジャーナル』とともに『ペニーマガジン』をあげた。⁽⁷⁴⁾

相互改良協会では読み書き算盤の他に音楽、図画、会話の授業も行われていた。トムソンは、図画と「会話」の授業をみていた。会話の授業とは、「歴史、過去と現在、社会の進歩、自然誌、地質学、地理学など」をテーマにしたディスカッションである。その授業では『ペニーマガジン』と同じように、「あらゆる議題には、チョークで黒板に描かれた絵がそえられた」。また図画の授業では、子供たちは花や動物や幾何学的な図形のスケッチをしていた。⁽⁷⁵⁾

彼はこのように図書館や相互改良協会について記す理由を、「田舎に住む人々のゆつくりとはしていても着実

に進歩していく様子に関心が持たれないはずはない」と記している。⁽⁷⁶⁾ 彼が自伝を執筆した前提にあったのは、「私たちの階級の進歩」の記録を残すことであつたのである。⁽⁷⁷⁾ おそらく、トムソンほど『ペニーマガジン』の読書経験に意味を見出した読者はいなかつただろう。『ペニーマガジン』の予約購読を最後まで続け、相互改良協会と図書館をつくり、のちにシェフィールド職工学院の副院長に就任したトムソンにとって、その過去の事實は読者を前にしてナイトへの感謝の気持ちを表わす価値を持つほどだったのである。

おわりに

『ペニーマガジン』の編集過程に作用する力学や、当時の社会的・文化的な位置づけは、これまで想定されてきたモラル・ヘゲモニーという視点からでは十分に説明できない。そもそも、ナイトは「労働者階級」だけを『ペニーマガジン』の読者層として想定していたわけではない。『ペニーマガジン』が出版活動や知的活動に及ぼす影響も考えたうえで、安価に知識を普及させるといふ『ペニーマガジン』のコンセプトに批判的な知識人へのメッセージが込められていたのである。したがって、

異質的な読者を想定することで、ひとつひとつの記事の編集方法は大きく変わっていた。ナイトが最も危惧した『ペニーマガジン』に対する批判は、『ペニーマガジン』が与える知識の有用性の是非を問うものだった。それは具体的には、はたして実際に労働者の読者が、『ペニーマガジン』が教える知識を必要としているのか、誰にでも簡単に与えられる知識というのは、そもそも知識の自己矛盾ではないのかという懐疑だったのである。

一方、『ペニーマガジン』が個々の読者に実際どう読まれていたのかを明らかにする術はない。しかし、自伝に残された読書記録が明らかにしてくれるのは、その読書経験の評価が決してその場だけで決まるのではなく、その後の人生の歩み、あるいは社会の変化の中で「過去の事実」として意味付けられていくことである。『ペニーマガジン』廃刊後、ナイトは自著の中で『ペニーマガジン』の果たした社会的な役割を記し、『パンチ』や『イラストレイティッド・ロンドン・ニューズ』などの挿絵入り雑誌の先駆けであると説いた。⁽⁷⁸⁾ 一八七三年三月二十二日、『イラストレイティッド・ロンドン・ニューズ』はナイトの追悼記事を掲載した。そこでは『ペニーマガジン』の読書体験が同時代人の共有しうる「過去の

事実」として出版文化の中に跡付けられるように、そして、それが集合的な記憶として表象されるように、『ペニーマガジン』にエロージユが贈られたのだった。

『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』が十年後「一八四二年」に創刊されるまで、木版画の技術と一般誌の編集方法を最もうまく組み合わせていたのは『ペニーマガジン』だった。……この総合雑誌は当時まだ少年少女だった人々の知的好奇心を大いに刺激した。しかし彼らも今や中年の男女である。彼らは最期の時を迎えるまで、懐かしい『ペニーマガジン』の想い出を胸に生きてゆくことだろう。⁽⁷⁹⁾

註

別に記載がない限り、英語文献の発行の場所はロンドンである。

- (1) A. Somerville, *The Autobiography of a Working Man* (1848), p. 85.
- (2) 十九世紀前半の出版文化については R. K. Webb, *The British Working Class Reader 1790-1848: Literacy and Social Tension* (1955); R. Altick, *The English Common*

チャールズ・ナイトと『ペニーマガジン』

Reader: A Social History of the Mass Reading Public, 1800-1900 (Columbus, 1957); L. James, *Fiction for the Working Man, 1830-50* (1963); J. H. Wiener, *The War of the Unstamped: The Movement to Repeal the British Newspaper Tax, 1830-6* (Ithaca, 1969); P. Hollis, *The Pauper Press: A Study in Working-Class Radicalism of the 1830s* (1970); H. Barker, *Newspapers, Politics and English Society 1695-1855* (Harlow, 2000). 大久保桂子「日曜は『読書』の日—都市民衆の活字メディア—」川北稔編『非労働時間』の生活史』(リポート、一九九五年) 六六—九一頁。

(3) 有用知識普及協会については、H. Smith, *The Society for the Diffusion of Useful Knowledge 1826-1846: A Social and Bibliographical Evaluation* (Dalhousie University Libraries and Dalhousie University School of Library Service, Occasional Papers no. 8, 1974), p. 56.

(4) SDDKの刊行物リストは、E. A. Storella, "O, What a World of Profit and Delight": The Society for the Diffusion of Useful Knowledge" (Ph. D. Dissertation, Brandeis University, 1969), pp. 266-70.

(5) *Penny Magazine*, "Preface," 1832, p. i. 一方、小説は想像力を誤った方向に導きかねないとして、政治は党派的な論争に巻き込まれるとして除外されている。なお同誌の分析には、オリジナルの資料とともに、*British Early Periodicals* (University Microfilms, 1969) 所収のマイクロ版、および本の友社による復刻版(一九九四—一九九八

年)を使用した。

- (6) R・K・ウェップはミドルクラスが労働者階級の言論を抑圧するために刊行したと捉えた。ナポレオン戦争が終結すると、政治的権利を要求する労働者階級の印刷物が出回り政府を脅かした。この階級間の緊張が高まるなかで、SDUKはミドルクラスの価値観を刷り込んだ書物を普及させ、労働者の関心を政治から遠ざけようとした、と彼は記している。そして、彼は『ペニーマガジン』の「失敗」をミドルクラスの敗北と判断した。彼はその理由を「労働者階級の大半の者は、他の階級の大半の者と同じように勉強することにそれ程熱心ではなかった。彼らは楽しみたかったのであり、実際あれこれと楽しんでいたのである」と判断している。都市民衆の読書について研究した大久保桂子も同じ見方をする。彼女によれば、センセーショナルな殺人事件を好む労働者の読者にとつて、『ペニーマガジン』はミドルクラスの意図が見え隠れする、生真面目で押し付けがましい雑誌だった。Webb, *British Working Class Reader*, pp. 77-82, 160-61; 大久保前掲論文、八四頁。また、デイヴィド・ヴィンセントはSDUKの試みを、「生まれたばかりの自己改良の文化に対して文化的ヘゲモニーを確立しようとする、ミドルクラスのみならず意図的な試みはこうして失敗に終わった」と評価した。D・ヴィンセント(川北稔・松浦京子訳)『パンと知識と解放と』(岩波書店、一九九一年)(二六八頁)。

- (7) ベネットによるテーマ別誌面占有率の統計からは、誌

面の多くが、道徳や節約を直截に説く記事より、挿絵の価値を活かせる自然誌やトポグラフィの記事で埋められていたことが分かる。また彼は『ペニーマガジン』のマーケティングを分析し、ナイトの販売戦略が当時の雑誌販売のあり方に大きな影響を与えたことを示した。彼は、『ペニーマガジン』は一定の合意に基づく大衆市場の形成を促した雑誌であると位置づけている。パトリシア・アンダーソンは『ペニーマガジン』を民衆文化と大衆文化との分水嶺に位置づけた。彼女は『ペニーマガジン』を大衆的に消費される一九世紀半ばの挿絵入り新聞の先駆として捉えており、「社会的、道徳的、文化的価値観の体系」を意味するようになったと彼女は説く。『ペニーマガジン』によって「芸術」が大量に再生産され、人々がそれを日常的な経験として消費するようになったことに彼女は注目している。S. Bennett, "The Editorial Character and Readership of 'The Penny Magazine': An Analysis," *Victorian Periodical Review*, 17 (1984), pp. 127-41; "Revolutions in Thought: Serial Publication and the Mass Market for Reading." in J. Shattock and M. Wolf (eds.), *The Victorian Periodical Press: Samplings and Soundings* (Toronto, 1982), pp. 225-257; P. Anderson, *The Printed Image and the Transformation of Popular Culture* (Oxford, 1991), pp. 71, 79.

- (8) 一方『ペニーマガジン』の特定の記事に関する分析としては次の研究がある。G. Tweedale, "Days at the Factories: A Tour of Victorian Industry with the 'Penny Maga-

zine," *Technology and Culture*, 29 (1988), pp. 888-903; S. Wadsworth, "Charles Knight and Sir Francis Bond Head: Two Early Victorians Perspectives on Printing and Allied Trades," *Victorian Periodicals Review* 31 (1998), pp. 369-86.

(9) ナイトは毎週定期的に『ペニーマガジン』を購読できない読者のために、週刊号四号分(あるいは五号分)に増刊号を加えた月刊版をホブンスで販売していた。*Penny Magazine*, 21 Apr. 1832, p. 32.

(10) *Penny Magazine*, 31 Mar. 1834, p. 124.

(11) W. Hogarth, *Anecdotes of William Hogarth, written by himself* (1833), p. iii; *Penny Magazine*, 31 Mar. 1834, p. 122.

(12) Anderson, *Printed Image*, pp. 66-67.

(13) 作品の分析は次の研究に依拠する。R. Paulson, *Hogarth: High Art and Low* (New Brunswick, 1992), vol. 2, pp. 289-322; idem, *Emblem and Expression: Meaning in English Art of the Eighteenth Century* (1975), pp. 58-78; J. Uglow, *Hogarth: A life and a World* (1997), pp. 438-52. 近藤和彦「シャリバリ・文化・ホウガース」『思想』七四〇号(一九八六年)一五五―八五頁。

(14) C. Knight, *Passages of a Working Life* (1864), vol. 1, p. 191.

(15) Hogarth, *Anecdotes*, pp. 61-62.

(16) *Penny Magazine*, Sup. May 1834, p. 212.

(17) Paulson, *Hogarth*, pp. 296-98. 最後の一組の版画(十

一枚目と十二枚目)は除く。ここでは常に勤勉な徒弟、怠惰な徒弟の順番も入れ替わり、両者とも画面の中央よりに配置されている。ポールソンによれば、ホガースは作品の順番を入れ替え、両者をほぼ同じ位置に描くことで、勤勉な徒弟が怠惰な徒弟の運命を、そして怠惰な徒弟が勤勉な徒弟の運命を辿ったかもしれないという皮肉を込めたと分析している。しかし、『ペニーマガジン』には、この作品に読解の重層性を持たせる最後の二組は紹介されなかった。

(18) *Penny Magazine*, Sup. May 1834, p. 212.

(19) 近藤前掲論文、一六九頁。

(20) Hogarth, *Anecdotes*, p. 62; J. Ireland, *Hogarth Illustrated* (1793), p. 215

(21) *Penny Magazine*, Sup. May 1834, p. 212.

(22) *Ibid.*, Sup. May 1834, pp. 214-15.

(23) ナイトの政治経済学論議の『W. F. Kennedy, "Lord Brougham, Charles Knight, and 'The Rights of Industry,'" *Economica*, 29, 113, pp. 58-71.

(24) *Penny Magazine*, Sup. June 1834, p. 255.

(25) Hogarth, *Anecdotes*, pp. 81-82.

(26) *Penny Magazine*, Sup. Mar. 1834, p. 122.

(27) *Ibid.*, Sup. Mar. 1834, p. 122.

(28) *Ibid.*, Sup. Mar. 1834, pp. 126-27; Sup. May 1834, pp. 215-16; Sup. Sept. 1834, pp. 383-84.

(29) *Ibid.*, Sup. May 1835, p. 212.

(30) *Ibid.*, Sup. May 1835, p. 212.

- (31) *Ibid.*, Sup. May 1835, pp. 212-13.
- (32) Altick, *English Common Reader*, p. 392.
- (33) 印紙税にひつはは Wiener, *War of the Unstamped*, pp. 1-19.
- (34) 「世間一般のニュース、重要事項、出来事を報道する定期刊行物、またはそれらについて、もしくは教会や国家に關して言及したり考察したりする定期刊行物」であり、刊行周期が二十六日以内、価格が六ペンス以下の定期刊行物には、全て四ペンスの印紙税が課せられた。
Ibid., pp. 4-5.
- (35) *Ibid.*, pp. 139-41.
- (36) Wiener, *A Descriptive Finding List of Unstamped British Periodicals* (1970)。
- (37) *Hansard*, 22 May 1834, cols. 1196-98.
- (38) Knight, *Passages*, vol. 2, p. 180.
- (39) *Ibid.*, vol. 2, pp. 180-81.
- (40) SDUK papers, Charles Knight letters 1832, n.d. "Lin. Inn Field Saturday, 1 [o'clock]."
- (41) SDUK papers, Charles Knight letters 1832, n. d. "Pall Mall East Saturday, 4 o'clock."
- (42) Knight, *Passages*, vol. 2 p. 181.
- (43) Wiener, *War of the Unstamped*, p. 5.
- (44) *Poor Man's Guardian*, Apr. 1832, p. 359.
- (45) C. Fox, "Political Caricature and the Freedom of the Press in early nineteenth-century England," in G. Boyce, J. Curran and P. Wingate (eds.), *Newspaper History: from the 17th century to the Present Day* (1978), pp. 226-46.
- (46) W. Graham, *English Literary Periodicals* (New York, 1930), p. 296.
- (47) James, *Fiction for the Working Man*, p. 15.
- (48) *Weekly Times*, 11 Sept. 1836.
- (49) SDUK papers 90, Advertising; Record of Spending on Advertising in Newspapers etc.
- (50) *Athenaeum*, 28 Apr. 1832, p. 274; Washington, "Penny Magazine," p. 194.
- (51) *New Monthly Magazine*, Dec. 1833, p. 427. quoted in Washington, "Penny Magazine," p. 197.
- (52) W. Chambers, *Memoir of W. & R. Chambers*. 7 th. ed. (Edinburgh, [1873]), pp. 234-36.
- (53) T. L. Peacock, *Crotchet Castle* (1831), pp. 19-28; Altick, *English Common Reader*, pp. 272-73; A. Johns, *The Nature of the Book: Printing and Knowledge in the Making* (Chicago, 1998), pp. 629-31.
- (54) *Morning Chronicle*, 19 Oct. 1836. quoted in *Penny Magazine*, Sup. Dec. 1836, p. 515.
- (55) *Penny Magazine*, 7 Apr. 1838, pp. 130-132.
- (56) *Ibid.*, 7 Apr. 1838, p. 130.
- (57) Knight, *Passages*, vol. 2, pp. 186-88.
- (58) *Penny Magazine*, 2 May 1835, p. 170.
- (59) *Ibid.*, 6 June 1835, p. 218.
- (60) *Ibid.*, 2 May 1835, p. 171.
- (61) *Ibid.*, 6 June 1835, pp. 218-20.

- (62) *Ibid.*, 13 June 1835, p. 227.
- (63) *Ibid.*, 13 June 1835, pp. 227-28.
- (64) *Ibid.*, Sup. Nov. 1836, pp. 513-14.
- (65) R. Gagnier, "Social Atoms: Working-Class Autobiography, Subjectivity, and Gender," *Victorian Studies*, 30 (1987), pp. 335-363; N. Hackett, "A Different Form of 'Self': Narrative Style in British Nineteenth Century Working-Class Autobiography," *Biography*, 12 (1989), pp. 208-26. 佐久間亮「ヴィクトリア朝の労働者と自己」『史林』七一巻四号（一九八八年）三九一七二頁。
- (66) J. D. Burn, *The Autobiography of a Beggar Boy* (1978), p. 39.
- (67) Somerville, *Autobiography*, p. v.
- (68) T. Cooper, *The Life of Thomas Cooper: "Written by Himself" (1872)*, pp. 1-2.
- (69) S. Bamford, *Early Days* (1848), p. i.
- (70) *Times*, 27 Dec. 1855, p. 4. 佐久間前掲論文「四八頁。
- (71) C. Thomson, *The Autobiography of an Artisan* (1847), p. 72.
- (72) *Ibid.*, p. 79-80.
- (73) *Ibid.*, p. 319.
- (74) *Ibid.*, pp. 336-40.
- (75) *Ibid.*, pp. 340-41.
- (76) *Ibid.*, p. 301.
- (77) *Ibid.*, p. 23.
- (78) Knight, *The Old Printer and The Modern Press* (1854),

pp. 238-59; idem, *Passages*, vol. 2, pp. 178-95.

(67) *Illustrated London News*, 22 Mar. 1873, p. 266.

「附記」

本稿は二〇〇〇年一月に慶應義塾大学大学院に提出した修士論文の一部を補訂・加筆したものである。